

〈解答〉

- ① 1 ア
 2 イ・エ（順不同・両解）
 3 オ
 4 ゆえなり
 5 〔例〕 酒に悪名が付く心配がない（12字）

配点 各2点 10点満点

〈解説〉

① 「耳囊」^{みみぶくろ}は、江戸幕府において勘定奉行や町奉行を務めた根岸鎮衛^{ねぎしやすけ}が、江戸時代中期から後期に書いた全十巻の随筆集である。筆者自身の経験したことや、同僚や古老から聞き取った話を集めている。

1 傍線①の直前に、「いかなる物好きにや（Ⅱいったいどんな物好きなのだ）」とあるが、これは「我は雷にうたれ死なん事をねがふ（Ⅱ私は雷に打たれて死ぬことを願っている）」という、「酒を好みし老人」の発言を聞いた人の反応である。よって、「いかなる物好きにや」という言葉には、「まさか雷に打たれて死ぬことを願う人がいるとは思ってもみなかった」という気持ちが含まれていると考えられる。このことをふまえて、「突拍子もないことを言い出すものだ」とある、アを選ぶ。

2 傍線②の直前に、「あるひはうつを散じ、あるひは寒暑をしのぎ（Ⅱふさぎこんだ気持ちを払いのけてくれたり、暑さや寒さを乗りこえさせてくれたり）」とあるのに注目する。
 3 「報ずる」は「恩にむくいる」「恩を返す」という意味。

4 古文に出てくる独特の仮名である「ゐ」「ゑ」は、ワ行の「イの段」「エの段」に相当するものであり、それぞれ「い」「え」に直す。

5 本文の八～十行目に、「恩は報いずとも、酒に悪名付けんこそ心うけれ。雷にうたれ死なば、そのうれひなし（Ⅱ酒に対して恩を返すことができないのは仕方ないにしても、酒に悪名を付けることだけは心配である。そこで私が雷に打たれて死ねば、その心配はないのである）」とあるのに注目する。つまり、「自分が雷に打たれて死ねば、それは雷のせいで死んだのであり、誰も酒のせいで死んだとは言わないだろう。とすれば、大好きな酒

に対して恩は返せなくとも、悪名を付けることだけはせずにする」という気持ちから、「酒を好みし老人」が、雷に打たれて死にたいと言っていると思われる。

〔大意〕

最近の話であつたらうか、茶屋四郎次郎という京都の豪商の家来の一人に、大酒は飲まないけれど、とことん酒を好んだ老人がいたのだが、（その老人が）「私は雷に打たれて死ぬことを願っている」といつも言っていたところ（それを聞いた人が）、「雷に打たれて死にたいとは、いったいどんな物好きなのだ」と（言つて）笑つたので、「その理由とはこういうことだ。私は、数年の間酒を好んで飲んでゐるが、（その酒というものは）ふさぎこんだ気持ちを払いのけてくれたり、暑さや寒さを乗りこえさせてくれたりして、（私はそのように）酒から恩を受けたことに対して恩返しをすることはなかつた。しかしながら、私がどんな病気で死んでも、自害して死んだとしても、『死んだのは）酒のせいだ』と言つて、若い人たちは当然（私が死んだ原因として）酒に罪を負わせるだらう。（私が）酒に対して恩を返すことができないのは仕方ないにしても、酒に悪名を付けることだけは心配である。そこで（私が）雷に打たれて死ねば、その心配はないのである。このために（雷に打たれて死にたいと私は）願うのである」と言つた。